

4 プラチナ系抗腫瘍剤の動注療法が効果的であった肝細胞癌の4例

—血清 APM2 濃度の治療効果予測マーカーとしての有用性—

小川 光平・上村 顕也・品川 陽子
 阿部 寛幸・高橋 祥史・小林 雄司
 熊木 大輔・水野 研一・竹内 学
 須田 剛士・青柳 豊・寺井 崇二
 和栗 暢生*・石川 達**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 消化器内科学分野
 新潟市民病院消化器内科*
 済生会新潟第二病院消化器内科**

進行肝細胞癌に対するシスプラチン等の肝動注療法は有用であるが適切な薬物選択のために感受性マーカーの検証が必要である。血清 APM2 濃度はプラチナ系抗腫瘍剤に対する抵抗性に関与することが胃癌、大腸癌、卵巣癌で報告されている。我々は APM2 の肝細胞癌に対する CDDP の治療効果予測マーカーとしての有用性を検討した。

当科にて 2007-12 年に CDDP 肝動注療法のみで治療された 71 例の血清 APM2 濃度を測定した。感受性群と非感受性群よりカットオフ値 ($18.7 \mu\text{g/ml}$) を決定した。さらに前向き解析として 2012-14 年に CDDP 肝動注療法で治療した 45 例を対象に決定した APM2 のカットオフ値の感受性予測を検討した。36 例がカットオフ値以下で感受性群は 28 例であり陽性適中率は 77.8%であった。

今回、我々は、シスプラチン製剤が有効であった肝細胞癌の 4 症例を経験し、血清 APM2 濃度がカットオフ値以下であったことから APM2 が肝細胞癌に対する CDDP の治療効果予測マーカーとしての有用性が示唆され、またシスプラチンが効果的でなく血清 APM2 濃度が高値であった症例を経験したので報告する。

5 肝悪性腫瘍に対する経皮的ラジオ波焼灼療法データベースの作成と有用性

廣澤 宏・石川 達*・阿部 聡*
 本望 翼・長谷川伊織・星 義弘
 吉田 俊明*

済生会新潟第二病院臨床工学室
 同 消化器内科*

【目的】経皮的ラジオ波焼灼療法（以下：RFA）の患者情報管理で、Microsoft Office Access にてデータベース（以下：Access データベース）を作成し情報管理を行い、有用性を検討したので報告する。

【方法】Access データベースにて患者マスターデータベースと RFA 治療情報データベースの 2 つのテーブルを作成し、患者情報を入力した。

【成績】2012 年 1 月から 2014 年 5 月までに 154 名の患者情報を登録した。RFA 施行件数は延べ 481 件であった。治療において合併症リスク管理を要したのは 85 件あり、RFA 施行件数全体の 17.7%であった。Access データベースでは、入力、閲覧、検索の手間を省くことができた。

【考察/結語】Access では情報の検索や患者ごとでの集計も容易にでき、治療時に起こりえる状況がある程度予測し対処を行うことが可能となり安全性の向上につながると期待される。

6 当院におけるアルコール性肝硬変患者の現状

高橋 俊作・杉谷 想一・大関 康志
 小林 由夏・飯利 孝雄

立川綜合病院消化器センター
 消化器内科

【はじめに】アルコール性肝硬変は非 B 非 C 型肝硬変の中で最多を占めるものであり、肝炎ウイルス治療の発達が著しい中で、今後増加が見込まれる疾患である。予後は禁酒の有無に影響されるが不良であり、肝細胞癌、肝不全、消化管出血が主な死因として挙げられる。予後改善を得る上で、各死因への臨床的理解が重要となる。